

みつかった遺物

今回みつかった遺物の多くは石垣16の北辺部から出土しました。その大半がすり鉢や碗などの日常的に使われた土器や陶器です。

これらの遺物は15世紀末から16世紀初頭にかけてのものと考えられ、当時の阿弥陀寺に生活していた人々の暮らしぶりを知る手掛かりのひとつだといえます。



写真5 石垣16北辺部出土遺物

まとめ—室町時代山寺の石垣—

今回の発掘調査によって、次のような点が明かになりました。

- ①今回の調査から中世の山寺跡と推定される阿弥陀寺の「北谷」に推定されるエリアから、平坦面とともに、あらたに石垣を1か所検出しました。
- ②検出した石垣遺構には、令和5年度に検出した石垣1と共通する点が多く、阿弥陀寺が機能していた15世紀末～16世紀初頭前後に比定できる可能性が高いと判断しました。

昭和34年竣工の簡易水道施設（かんいすいどうしせつ）について

石垣16の東側から「昭和34年竣工」と刻まれた銘文をもつ簡易水道施設がみつかりました。簡易水道とは、給水対象人口がおおむね5,000人以下の地域を想定して整備された上水道施設のことを示します。

写真左側にみえる堂川の流水を取り込み、3つの水槽を経由して浄化された水が昭和50年ごろまで近隣の各家庭へと上水道を供給していたと考えられます。

この簡易水道事業は昭和30年以降に進められた生活環境の改善や公衆衛生の向上を象徴するインフラ事業の一つです。地域住民の協力のもとで整備が進められ、高度経済成長期における地域社会の在り方を示す貴重な事例だといえます。



写真6 簡易水道施設

今回、検出された簡易水道は計画給水人口が420人と想定されて造られました。滋賀県厚生部1969『昭和43年度 水道施設現況調査』

表1 阿弥陀寺の歴史と関連する主な出来事

時代区分	奈良時代以前	平安時代～鎌倉時代	室町時代	安土・桃山時代	江戸時代	明治時代～令和
主な出来事	仏教伝来(6世紀前半)	794年 平安京遷都	1467年 応仁の乱始まる	1571年 比叡山焼き討ち 1579年 安土城完成 1600年 関ヶ原の戦い		1939年 第二次世界大戦 開始 1945年 第二次世界大戦 終戦
阿弥陀寺の歴史	大島・奥津島神社建立(伝承)	865年 阿弥陀寺建立	今回発見した石垣はこの時期！	1571年 阿弥陀寺焼き討ちか	平坦地を畑に転用？	1957年 簡易水道設置 2022年 発掘調査開始

あみだじ 阿弥陀寺遺跡発掘調査現地説明会資料

令和7年(2025年) 10月 26日(日)／公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

阿弥陀寺遺跡と調査の概要

遺跡の概要 阿弥陀寺遺跡は近江八幡市北津田町・島町に所在する遺跡です。その名の由来となった阿弥陀寺は平安時代前期(約1,150年前)に建立された寺院で、『日本三代実録』・『大嶋・奥津嶋神社文書』などによると、貞観7年(865年)に大和・元興寺の僧賢和により奥津嶋神社の神宮寺(神仏習合思想に基づき、神社に附属して建てられた仏教寺院や仏堂)として創建されたと伝えられます。また、それらの文書には東谷・西谷・北谷に坊群があった、との記述があります。

中世の阿弥陀寺 中世の阿弥陀寺は、かなり大きな天台宗寺院だったようです。現在「竿飛び」で有名な伊崎寺(近江八幡市白王町)に伝わる『伊崎寺縁起』には、阿弥陀寺が長命寺・安楽寺・石馬寺・千手寺と同様に天台回峰行のルートにも組み込まれ、天台宗の重要な行場とみなされていました。また、文安元年(1444年)の大嶋神社鐘楼造営にかかる勧進帳には、定泉坊・大定泉坊・中学房・本願院・定智房・東林房といった坊があったとの記載があります。しかし、延暦寺が焼き討ちされたとする元亀2年(1571年)に織田信長による焼き討ちをうけて衰微したと伝えられていますが、詳細はわかりません。

現在の阿弥陀寺 現在の阿弥陀寺は、江戸時代に再建された臨済宗の小さな本堂と山門が残るだけですが、そこへ至る石段が残されています。その周辺には山麓にむけて直線的に道がのび、その左右に複数の平坦面がひな壇状に展開しています。この雛壇状の平坦面群は、『大嶋・奥津嶋神社文書』に記された「北谷」・「東谷」・「西谷」(図2の緑線で囲ったエリア)に対応すると考えられます。すなわち、現在の阿弥陀寺とそこから南の山麓に向かう道を中心として展開する平坦面群が「西谷」、「西谷」か

ら北東の山頂付近まで平坦面群が広がる一群が「東谷」、これらから少し離れた北側の大嶋・奥津嶋神社に向かう道を中心に展開する平坦面群が「北谷」にそれぞれ相当することになります。

調査の概要 公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県東近江土木事務所が計画する堂川補助通常砂防工事に伴う発掘調査を令和4年(2022年)11月より実施しており、現在も調査継続中です。

令和4年度の調査では、土石流の痕跡や江戸時代の石積などを確認しました。

令和5年度の調査では、複数の石積・石垣や道路遺構を確認し、その一つは水茎岡山城の石垣と同様の構造を持ちます。また、令和6年度の調査では、15世紀から16世紀にかけて機能していたと考えられる道路遺構が検出されました。

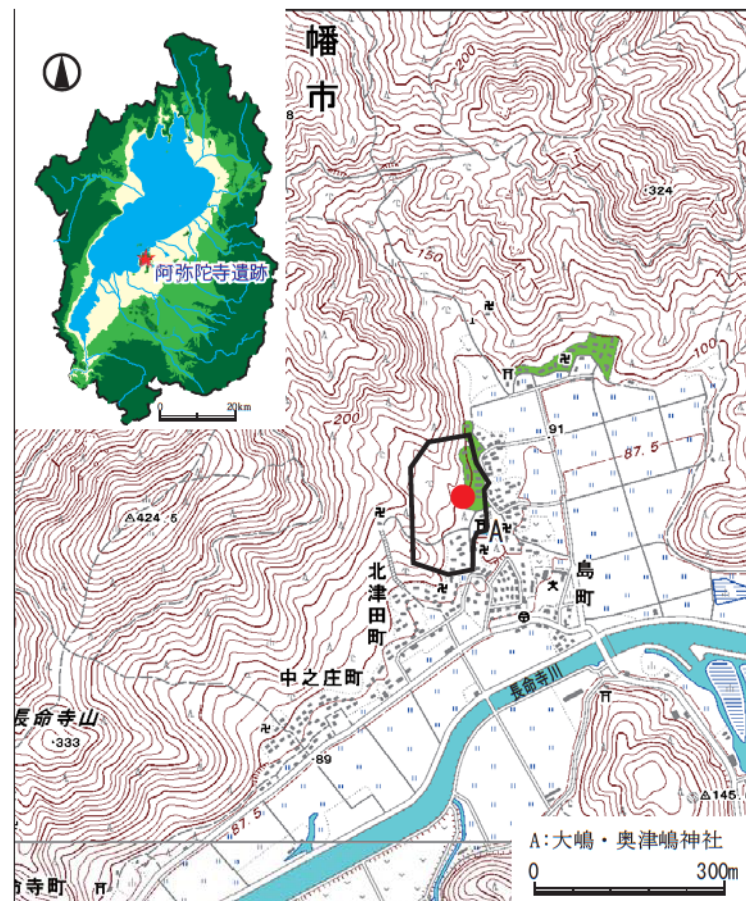


図1 阿弥陀寺遺跡(黒枠)と今回の調査地点(赤丸)

みつかった遺構

石垣 16 今年度の調査では、9月時点で石垣が1か所みつかりました（以下、この石垣を石垣 16 と呼びます）。石垣 16 は、堂川沿いの平坦面の1つを取り巻くように設置され、平坦面の北辺部（写真1・2）と東辺部（写真3）に石が積まれています。使用された石材は湖東地域に分布する湖東流紋岩です。



写真1 石垣16北辺部



写真2 石垣16北辺部

北辺部 北辺部は基底部の標高が120.9m～129.9mに位置しています。基底石を含めて4～6段程度石が積まれていました。基底石の大きさは縦0.4m～0.6m、横0.5m～1.0m程度の中型の石材が使用され、石材の上端部をある程度揃える（横目地を通す）意識がうかがえます。

基底石より上位の築石の大きさにはばらつきがありますが、横0.2m～0.6m程度の小型石材や、横0.6m～1.1m程度の中型石材が用いられています。目地はあまり揃っておらず、まばらに積まれています。石垣の上端部（石垣上段の平坦面縁辺部）および崩落した築石の隙間から、背面に裏込めが充填されていたことが確認できますが、現在調査中のため、詳細は不明です。

石垣を横から見ると、築石の角度（勾配）は全体的にほぼ垂直に積み上げられますが、基底石は築石よりも少し前に出ています。それに対して、築石は、やや奥まった位置に積み上げられています（写真2）。

このように、上位の石材の大きさにばらつきがあり、目地が揃わないことから、基底石より上位の石垣の一部が後世に積みなおされた可能性があると考えています。

一方で、石垣の東端隅にあたる部分は樹木により崩落し、その詳細については確認できませんでした。



写真3 石垣16東辺部

東辺部 北辺部から直角におれて続く東辺部については、石垣の大半が崩落して失われていました（写真3）。その一部には、裏込めと推測される石や築石として用いられたと考えられる石材が部分的に認められます。このことから、本来は東辺にも石垣が存在したと想定されます。

また、東辺の中位に幅1m程度の箇所には段状地形が認められます（赤破線）。この段状地形の上面と北辺石垣の基底石との標高はおおむね一致しています。斜面の崩落により不明瞭な状態ではありますが、東辺では本来この段を犬走り状のテラスとして、上下2段に石垣が築かれていたと推測されます。

構築時期 このように2段に石垣を積み上げる構造は、令和5年度に検出された石垣（石垣1）もみとめられます。さらに、石垣1では北半部で修復がおこなわれていましたが、修復部の埋土から戦国時代の遺物が出土しています。以上から、石垣16の構築時期は石垣1と同じく、阿弥陀寺の機能していた時期に想定できます。

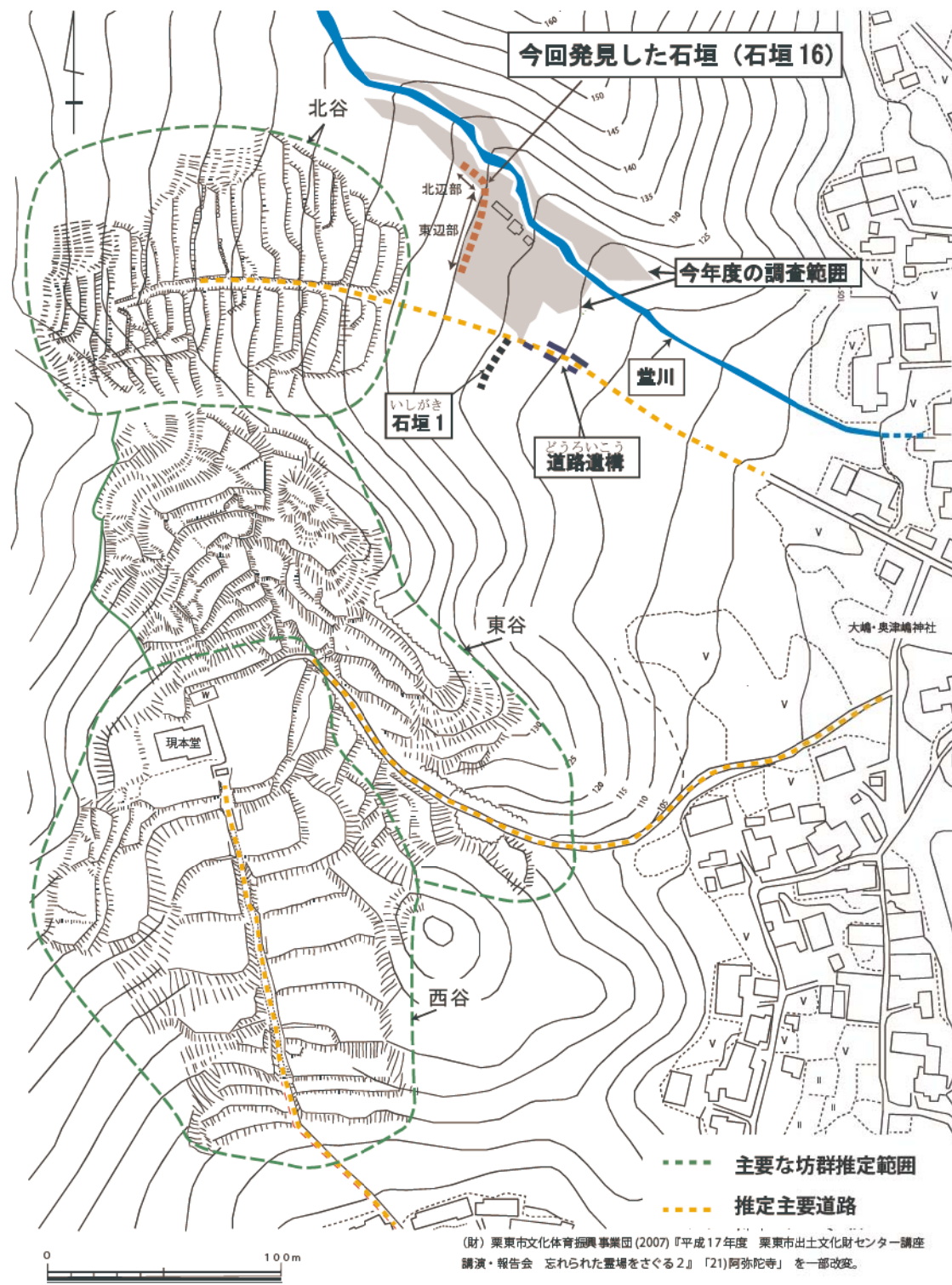


図2 阿弥陀寺遺跡位置図

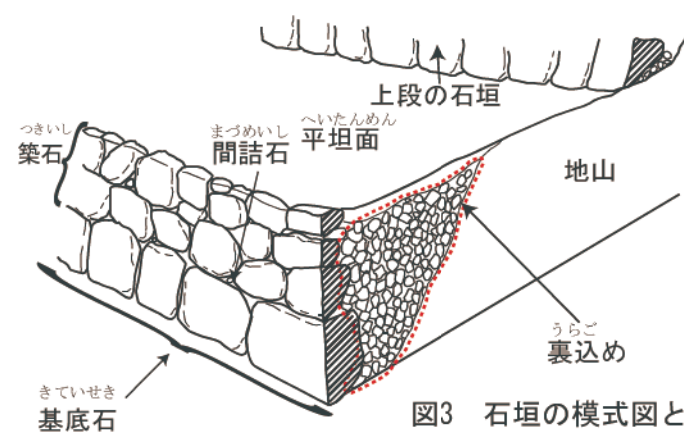


図3 石垣の模式図と部分名称

- 基底石** 石垣の最下部に据えられた石のこと。
- 築石** 基底石よりも上部に積まれた石を指す。
- 間詰石** 石材と石材の隙間に詰める石のこと。
- 裏込め** 石垣の背面に充填する石のこと。排水機能の役割を果たすとともに、石垣の崩落を防ぐ。